うつほ物語

筆乃孫

上

十
並巳

特別
へ12
4327
10

絹のさえう給九巻十一オモテ　○母后の御六十賀ろ十二ム
又中務ナカタメ臨時ノ使十七ヲ　○ノ后宮賀ノ九七月十九日
●スクレノ中務十八ノ　○賀ろ〻九一九二
ラウスケ十五ヲ〇十八ス〇　○カタサリナナ
サフルヲトメ十七乃

今〻。篆安
白本同九上
緋本五并篆瑞

今四 十八オ九月廿日トテ ココト同シサマナラン

此丁ト今四ノ十九ト オモムキ似タリ

忠明ハ非也 正明ト改ムヘシ

源中ハ行中ナラン

てうしを月の朔日よりはしめて菊のえんきこ
しめしけるよみてこかうのむすめまつり給ふせ
文人おほしてあそひはしてをさめおそひ給ふ給
大将のおとゝ御まゐりまへに給ひへくて夜ふけ侍て、
左大將御あそひ給ふしき給ひくてこゝにおはせける
ころほひよふくるまかさせ給ひけれはちかくまゐりのせら
れしはきけはめしてひとめ給ひけれはそもしまて
やれのみことの中ふいたらく給はむ平中納言
かりやそれをもちてさしをしくる給ふ源中納言そ
うし給ふ大将は綱をみひかりとてあらくかう
よこれと母こそれそれもむしおやきみはさはめの

へ12
4327
10

昭和廿四年四月一日
髙田早苗氏寄贈

忠明ハ非ス正明ト改ムヘシ

かくてしも月の朔日ころ、れいのきくのえむさ
あそびしけるよ、みこたちかむだちめまゐり給へるせ
文人おほくして、ふえ律くゝを御あそびなどし給
大殿のゆゝしきまつり給ひ、かくて夜ふくるまで、
春宮御あそびなどし給ひて、かくておほにおもせる家
るかよしゝまゐさせ給ふされはあくりのせう
おしみ給けれはめしてしそへめくくれとさしまよ
やれのゆこの中にいふらくはかむ、平中納言
かりやそれをもちてかむこして、源中納言そ
うし給ふ、右大将の網にかゝりとてまうくかう
よこれしこのことくれするむおやよれいまめの。

それ中にそは悪。はゑんのときえ人/\はとくれなゐてそ
ぬしみ給へれとかく兵文れらくくたらんの地くを
のくよ主りふてるとい給らむ。平中納言さむくは
あらし文とこ当やかおり。兵部卿みとさむねるも
のさひやとて。左大源宰相とみ多り給へ。らるし
と思く物との給へるそ。左大めれつくらるなら
り給とひくきしむ。なお地しおせまてゝてた
てまつり給ふ母をとりしこまりてそさうひた
うあらぬ。左大こその侍へくはしえとおへとす
ろよおわしつゝ。文のる給みを物とは給ひの人くは何く
せくおこれしこのそれと。地きくへくも物そう

まれなれとの給ひけるよ。かく大将の地くあをかの
きこえ給ふ。今日(けふ)こそはやしくはすれたるくと
ともみをはいりてみるとほゑつまたりゑめして。
いせれとつまみて給ひなれとさはかしく
かりつまふ中の給ふ大将の君られさうしこ。
まいもまつひ給ふく。病(らう)とくし給ふそ。
むさしうらみとまつはれ給ひつる線だくあまた
人のはけにつれなきむ。地くつきまうしはつひ
給ひつとて。御物くらし給ひつゝくふ。なよりそ
きこしむをそのはるとゝしめやられつるけ逢
え。えきさくなされ。あ給をふしめやなれつ地り

侍らしといひてうけ給りてかへれは、文をとりてきこ
えけくるしやれとてすゝむつきをうへにかくれ
とゝまるをとゝむ給へはとおほしめさるゝ
うらやましくやゝせまほしくなりまさるやまとに
なくとてすゝむ大将おなしこゝろあはせたまひ
さらにみえまうて母へともなくのみかきつくり
侍らうつくしきのみ物まうしさらに心てかくらむや、
しそあむ、これはかりかしらくちしかれみと
しれなき侍へさうゝつからうけれ、世のためしめ
こそのせうし去文もてよやゝ侍りはくもの
まつりやうそせ、あれとまうし給ひ大将の

一内親王トアテコソノ子今十四
十八又ムニアリ
注ノ長ハ仲ノ誤

御とゝなる中にも思ひかはらの御ぜこ
の神泉苑の紅葉の賀のをりにすゝし
にかしすけしとのわくらむはくゝまゐりたり。
の網代に一の内親王すくしのおとゝに
まさりける九よはうらむ院のかへまいりせ
ゆくくらゐしゝ母も侍りし給ひ去文きれとい
まれことはそのあれまいらせはちかうえそはす
そこにあれ、うしこにさてはひきしれならなむすゑ
大将せむしとをしむを女御に給はれと申すむちそ給へと
つゝひ侍らぬかそとかはゝそをせされそら
にてそいふあれはまゐりつかへいそ。大将とこのせ

注ノ長ハ仲ノ誤

侍らしといへるそうけ給りてこれ。あまたとくはこと
えほくさやれとそ思ひつきうえことなくんぞれ
さしまゐるとなむ。給ひてみとおもふさゝやかなるえ
くりこ給やたましれとせへむかゝやかとやとら
ふかくとてなむ。大将おほかし。ことわり給はせとそれ
きしらかもあゝさてぬへきもとむ色ゝはゝら
行ふつてみきのこ給ましさらひてくへらむやい
こそおむしられれよくろう給ひしをへしおかれみこ
しれん給へさゝ侍りさましくれせう給ひしぬ
こゝのせい表文給ひしとやま給へり侍くものと
つ給ふやうよきぬとれそき人まし給ふ大将の

かし給ふかさ中なと思ひくれかなり給ひこ
の神泉の紅葉の賀のきのおはしけ、すゝし
給ひすけ給としめくらむはくくまうりう。
なかたゞの網代よ一丸内親王ずゝしのあそ世に。
まさよりの九よはくらむせかしまなれましせ
みしくらみしきれ世侍とう給表文をれてい
まれてはそおれま一ふてみはせとみえてほま
さこおれうしこにさてくひそしれならあむすみ
大将せむしとせむ給神よ給れゝあむなを給へて
つしひ給ふ給ふそへおはゝそしせさはへら
にてそいふあれましねめりしまゝいそ大将さとは給せ

こゝにしうこむ子ども、おほくし給ほ、そこらくの人を
とむもくるしく、ゆ月れよ源宰相は、おもくれ
りあくたまり、たまへしおもとあさましきにくまふ
らぬと、よゆくてやうつくしく、いとかしとえやまも
まゐり、玄文たゝしまれ、ゆまへり、くもしらぬ
みこたち兵部卿、中務これゆくたいふ侍中納言
殿、源宰相、大将殿子たゞ、すゝしたちまつるら
権中将ゆうしきらをぬふく、式部
大輔なりし進士、これはまひの季英、藤英は、やの
やうあそびまつりのたまへ、学生人々は世の
ともつくてとし給ふ、はくうくかこきて

まうく楽はなむいはふむゆにゝやゝくゐらく、え
れ物うてもすかうむそちひみ、さうたせ
まゐりまてしるるもろうきこそるまうりつひと
こゆく給ふる

かくて大将のきたのかたまうで給ふ。宮はここにし給ふ。春
宮よりもわかくてうちにいますこのきみやあり。
あさわめり。北のかたのきみとそのほかのきみたちやおはして
たとうくことして侍ふとせらるよりなら給へつりは。
えいたうそへてさふらひ給ふ人々のみこ中
納言いとゆゝしくもいふつのりに。源宰相実忠
明けがたになりておはしましつ。たのもしくこれを見
まゐれおとゞにせさせたまふかくこゝろみくれのし給へるを
給へりつる。宮もいとゆゝしとおぼしたれ給へりつ。かの
やしきこれならばてこそ。まゐりかはりてもいとお
しきおはしまさはいかれ。宮をまうくるおとゞはなか

ありしもさいつころまかりて侍りしかば人々かくれの
すきものしてならひ侍りそとおほしめしよく
の侍りしにこそはあなれ。大宮源宰相ねさしなる
と申し人はわかくおかしきさみあらそよろつきなし。
やくしうことひしつむれとそれしけそなる
りがのんたさへはあれそくてもゆきれとむら
しれわせてこそ紙さいそわたりてほとはおりなら
なせしりのめしいうそくなれとものみちに侍は。
くちをしいわざそのみち人めつまるゝ物かはされ
をおり人くそそおのこくも一のさまふくてよはひそれ
しとやすれるとのくちよりあかし。女御さまおはしまして

侍るむとこそ思ひ侍りつれど。御むすめの車火つかう
[illegible]侍る侍ほど侍らんかはかりかくれなきありさ
れはしまかりて侍りしに車のとんしもとそく
みえりておもひけてまゐて侍りつ。大宮あくはつを
めく。中の物とゝにまうらおもらゐにとひさうけ
つれりてすれ家主来の思しておしまへおとくにそ
あさゐやまうりへとおもれさゐやそとさこそ
まうり。女御そなさにもつまえりてとそてとる
侍りつ。家北とにまうてむとすそまゐりまゐれとそ
ひさしう数うぬやしつゝのよそそあれそのゆか
つれされるんとのさゐもいつまて侍りせさうつまと。

おりしもさいつころまうむかへ人々とくかの
ぬしとゝもにてうちまゐりしなとかきしめかく
の侍はた候にそいはかれ、大宰源宰相さいへる
はかる人々はわくぬかしさをみせつそもろつきゝし。
かくけしうもあひつひとれそれしめそれある人
くかめかんた、さしそはかれとかくてともかれとも
しれおほさは紙をいそをあまうてほとはかりなら
ゑせしうぬめしいそこなれとものみちにかきは、
くく女をいおほきそれみち人かつかまるゝ物のいはれ
とかりくゐそそ、あめかくとゝ一ゝのさまふ人くくよいへれ
しきやうれるとのかまふかとれ、女御まんなまうて

給ふむとゝもに給ふつれん、御むかへの車大いつら
四位五位六位なんかりくらくなれのゝ君たちさ
れくりまかりけすつくいれは車のとんしてろく
人々かりて、ものかけてまゐりて給へり。大宮のおく面へを
めく、中乃かたくにとうらのすゝにとひさうけ
つれけ女ん宮大宰帥忠しておしまんかくにそ
あさゐやまうり人々さ、ちかれさみやえ人々ちとさえし
まうり、女御をみさにおひのまゐりてとそそゝ
給へり、宮おほきこにまうてむとせそ左内まいれとそ
ひさしうまかりぬやしつ、さみえそあれそのかた
つられさんるすんとのきみいまは給うせさらつまと、

七夕ノ心地ヲ今四ノ廿三ツニハ二月ハカリトス

ノ主ヘカヘシ女御ノ君ヲ今四ノ廿四ツトニノ主ヘカヘシヤス所トス

あやしくるやましくのミ給ひはてゝつまゝく
海とくつかせやなとうちは地わきゝてすこし
まいのこゝろかさやこうしくろしこえす文れとハ
ちらくしうつろり。ゑるはかなきハ女御乃君
いさやたれさこれなちせしてなとなむ文ちら
ちらひ給くもみちのちていつにそこそ梅くら
しまうたいくよおもて文ハなりくうかくてのこと
ふやうくもくさの給へり。女御の恩なる手紙
られそとやのれもいとれたそうきこえむ。
地くはいくちうえなくむ。文そもやくさらさめ
られさかり。春文なむ御つきありてのことふ

なれなりさらにもゝ地わきゝて給ふ事ありなりと
なむ。女御乃恩春文もりハなる紙とて給やさし
されとやむことなき人地わくは給そておの人なり
はらくれててちらひ給そうこさそれにそほち
まい女御のみこと人え地得れとそれなくにしも
なれものなれ肉みを二文たえ給らうてそこてえ
れとさうしぬ。たえ承ハ地わせり。地れしきこち
とれともれとおもわしくめくたくとたうてまれ
こなれまこの恩よられさうくひ給を母とそてさ
みはかうてうのさしもみし給をむおはゝ乏むな
うそてはくしあゝちりハたくふてうりほうやうよ

あやしくるやましくのこと侍るはいとつまらく
悔しくつかはせや。かくてはおぼつかなしとぞ
思ひのこるかぐやこゝろしらず。女御とは
はかなくしらつろり。はかなきは女御の君
いとやむごとなきおぼえしてはかなくさかなく
まさりてもみちのちにはいまそぞ物くら
しるくはひめよ。めでたくかなどくてのこと
をかしふみやらくさくの給へり。女御の君すぐれて
られそ。さやかれよりもれたそうこえむ。
おぼしはいくさうるなむ。さのそもかくちうさめ
られきかり。ただならむ御かたきありてのたまふ

たのもしげなきにもおぼしをきつる事ありけると
なむ。女御の君を春宮のやうにはなちてきんやさとし
られしやむごとなき人おほくはべるそ。その人々
はかられてありしひがみそうこそ侍りしそはら
まし。女御のさまし人々おぼしけれどそれかくにしも
うれしものなど。内のおとゞ二所は女の御こともてさてえ
れくまじくぞ。太政大臣はおほやけしるしまつら
とそらおぼれとおほしまがくたちまちもと。
ゆめまことの君よりはそれひなきもよも
みえかくさましとも見えしおもはむよりは
すこしをかしうあるにはなくてうつろうかりよ

ホカノメラコソアエ物ニヲ今四廿五ホモミオモトニモアエ物ニハトス

てうどもなどまうでさせまうれハさやうれまじき
給ふらん人うれしかりしことふいえものとを
みそしひくの給へとさへさらてはこよういことそ
あるめ。いとよいさむかしかうそとをかしうまうれ
まつりハそのすうへいさしろめくそあるゝや。
ことゝもハ、御返し物かへり女院乃君あれ殿くしかな
さて一日御物かたりし、御ことあそはしかく
御ことゝもさら。御まくもみな御うへまして御あ
そのあるてかくにうかゝふあれ物かもらう
給ふてましてまゐりかうくてられ殿たけそ。
れうらくはしうみ給ね。殿の御しうるふき女御の君れ

十一月ノ神楽今四廿五ノ

イセノ君タツ 源中ハ仲忠カ

コノソレニノ 可尋

メクラシ文今四廿六ツヌ

物かたりしおはしますみえさせ給、いつはりなきは
かくもくれにし事は、これ物語かきける人のこと、うちはそ
まさにありし所ありのまゝにかゝるはかゝるかたかられ
かの給ふ。大将殿よりはしめ物きこえさせ給ひて、させ
まゐりたまひても月の夜のことゞも給へさせ給ひ。
伊勢の君なとこそ給。つき源中将のもの給こ
とそすまひこれはひのかみすこしおりおちさせ給く
やかましきとてゑいくぞ、れいの事にとめまく物
をされは、伊勢乃君まいの物ともはしまかりめしこの
それのさまにてかくれてうちの気をとりて御か
つれなしおもふ御前ちからしく給ひてかくおはさう

てはうちもむ。ゆつゝせうそこまうされは。さやうのまゝに志
給ふはさ人うれしかし。ことふいえものおもひ
なとしらくの給へとさらては。ようなはこそ
あるめ。文よいきむならなもとむさまうれ
まの。はなうのいう。文うしろめたくそあるや。
れはきとましは。御ふみかりお女はの君あれ給くしな
とて一日の帯刀かへりし。御ことあそはしけるこく
ゆふくれに。ゆきてもみなかへりまして侍あ
そいありて。かくのきさいわの帯刀ともたいう
帥ふてゝしてまつりなふ。くてされ夜ふけて。
れいのくよろつ給ひ。給のゆくな文女御の君に

帯刀うらしうおもうかへる文みていらいゝわうゝちは
かくしかくれわしまは。らされ帯刀まゐりたりゆるときこゑるを
まうらるて雨ふりなと給くもりのまつりゝこうなり
かのもたい君帯刀あるかれくて帯もら出れてをそ
まつりまうりうくてつき月のみひくま給へ
伊勢の君はえて給つきれ源中将ものゝ給こ
ときすうこれはいのみはすうしろもうせく
やかりうされをえていはそれ御事のつらとめく帯刀
をされは伊勢の君まいの帯刀ももいはまうかけひとの
そのうちのされもといはらの君てとをなき
ものうそおもゝ侍の文字のやうしとてかきれりさう

なれ琴一つきゝくはらいさば、すまつ、いせのことはそ
ひの神ともいえやうこえはらしのをすべくまうとよ
まじやいのしのくまふりくて北の秋にならぬれ
としされそこそ、さいわらしとおつすしとそ、あけまえ
つきらて、こひろふえ舞さ、歌うらひつされを
わされはふつぬ、そくいさまんつらわらとり
なかうむあちめえくちお乃らちらちふあ
ろうゝりつくひまう、まおしく人ふそく、若紫くみを
をとての中将あらむまのしまふゝく人うをめくう
ゆふをうしれこはりてまゝは山人さくれまの
なはいてしうこきとつかまゝ

カクラ哥今四ノ三十表

サカノ井ニ

神楽哥ニヤヒラテヲ手ニ取モチテ

ワレカミノカミノカラヲキセシヤカラヲ

キ　右韓神

ロ榊サカキハノカヲカクハシミトメクレハ

八十氏人ソマトヒセリケル

ムウハソクヽ　山フカクヽ出所

尋ヘシ

やわしてをまひとゝのめらて山ふかくわけいり
りそてゆかしれさて、かゝのさ海へわりにまよせ
いくらむ、はなれそれをさかうらみともあれ
て、やそうち人そまうひしよせり
もまくら榊とるすふ山のたるかすとはれそて
しとはわかねえ、おほくあそひきほとあり。
あをのみて中ねまちゝ大のれはて、なせそそ
こゝにゆれど、おしれ北くふあしいあひしあつりかはつ、ありや
いのみこなるかゝゝふくくれうさなかしう
かゝゑうしと、こゝひをわれしかとのゆるきかく
らそいしよせ給てんそへ、おもてみをよいりまへつりぬか

サカキ葉ニ巻　さかきはゝくワれをこゝそくる榊葉のえく

かれ琴一つきくはかりはばすまひ。いせのうみはそ
ひの袖ともいへやうさへたへぬをすへくうまりとよ
まむやいゑしのきまいりくて世の秋さかりぬれ
とくされなるぞ。さいわらしと立つまりとそ。あけまえ
つきかりて。さいらふえ弾きさ。ひつきされを
思ふされたへぬ。そしていさまつりありとり
たらくむ海ちめくこちあらふらふよふあ
ろうさりつらひきつり。まちくん人ふさ。楽部々みを
そくの中将きむものゝふかくんもとあつり
給ふきうれとおりてまうき。山人さえれもの
給はしうきこえつまつる

やむごとをまたちつかりて山ふかく。わたわり
すてゝいふかたなくく。かきのこのへりかまゝせ
たよるも。たかれされりをかうらみとあくれ
そ。やそうち人そまうひしよもう
うきにたつせきりかうすふ山のたあるうとなれ
しふなしかくねて。おくとくあそひそうほとろ。
なあひのみて中ねまえてくたてののれもとに。のせさうそ
こゝとゆれて。おりのれもくふあいわむし給つ。なア
いのみこたかうかうくふくなうくたりうさにもう
まで海さうとしと。これなとひとれしかとれ御とくか
らそいときせ給ひてそういおとて海よいまかり給う

一日マイリテ侍テ今四ノ三十
イニ一日モマイリタリキトス

ひゝ宮の人々におはしましけるほどうけ給はりてまいり
こせしとおやしき人々まいりこゆへ御ゆるしひろく
あすもしつゝまちて侍りしにこゝろゆかされり
まさかりさぶらく御らんへとをとうむの給をせし。
しうくは對面することのかれ也むつましう極
くやしかりつれなかなかするもはにかうしぬかりて
りてはらむやかの御事とえきこえぬ事ともあり
こそ御ゆきをうけくめさらぬくちへかへり
うれしきよろこぶべき夜の宮きこえられよといふべく
みえてまつらむはけしうくぬ物ものいまぞ
きこえも御後見をさせむとおもふまへとゝまりし夜

太政大臣ノ大宮ヘカクノ玉フ今巳ハ
分論今十六廿三表ニモアリ

太政大臣とゝきこえ給へ。大臣の御心にはやいまは
さまことくいますけ玉ふとつましくひれさせ給は
まかりこえさせむとこそおもひのふ事。月ころおひさ
まふ人の。つかうまつる所なりぬるとしまかりくるゝれ
らぬ物をおもはされさせまつらかゝるとはらくさて御しお
みかれなりてとふものをとりのことゝ心えさせまいりかはらでこれ
ふとく人々をりつとかさん思ひ給へしえれとかくひなすくせむさ
おほつさこ思ひまへる御中にわかうえきみもおほ
まうきもれん。こゝろのあまりをうちこえたる御おもく
ともかゝめ中にかいつそとおもへ給ひと。えみ給ひつく
のこゝあまはずらつまうやいてくるとそるいかゝ

むかし宮の人々をかうしまゐりてげにとうけ給はりてまかる
ちやうせしとおやしきへまゐりこゆへ御とひろく
宮もしらずとつかまつりて申さふらへはかうしまゐらせたれり
まさかりさぶらふ御かへりごとをすゝむの給はせし
道くよ對面することのくれ御目むしろに極
くはれみつれ色らする猶かはさくおもふらぬ何と
りて、はらむかし申目をとえさうぬ事ぞうり
こそ御ゆきまとうつゝめ、さらぬ人くはへもかう
うれ夜、もろ〳〵夜乃まきらるれとよ。いろく
みそてまつらむ、まさけしく〳〵ぬ物とものいまいそ
きころも御鏡をさせむとのかまとえころし給夜

なれ、たかうときこえ給ふ。まれ〳〵乃みとりそやいまハ
こまへさせさくらいすけ王とがまうしく〳〵ひれさまい、
まつりさそくさせむとこそのひのかまひ、月ころのひさ
まふ人のつかまつりめるとも、まつりくらもれ
らぬ物よせさせれなうまうしつうくと行くさう御しお
ぬしれなりくいふをたのことなくさせてつりうへの御かゝり
みも人へまゐりつとゐん給しうれとかうへいをすくまゐれさ
ふつらさのいゐそ人く御申ありうえさもおも
まりまいれ。さくらをまつかをさう御まにく
をおもゐ申めまいかそとのい給王とえみ給まりく
のとおまへはすゞしくまいてさらしそてるむ。文

つゐやふくらけ給はりしかは。こゝよりもよく
きこえ給ひし。いとうれしくなむおもひたまふるを
とゝめこゑさせむとてなむ心地ねさらし
こそはこしそめしうちのことそいとうしろめたく
しくたのもしきは給ひしもかくこゝに給ふ事ともあら
くらそらくてはさ給ひてこゝにうらみも
めてたくさうらうもれ禄ともかれしを給はそのく
ろくあそひすさましく侍るにこまうれとすめかとに
源中将まていゝくらふきのそてま
つりへとゝさうらひたくせまし。それなふしかやすそれ
とふ。式部卿のみこ源中納言のあそむはかはり

ちかくのまへ川かえさむ。いとくつかうまつ
れ。うたけのきむさるかや。かのかむ女かあるか
はかりたまはして、いかゝ。弾中将のあそむあそはせ
ら給ふ。ましれたえ給ふ事。仲忠のかみにたなふえ
律めやかれかこめてそうかくそそのかし給ふ
てたくへいかゝ。すけたゝのあそむ。すゑのうちそえ給ふ。
ふこのみのこゑなむ給ふ。あれかせたやのよやなか
あつの琴たまふのうえり給ふ。こうてん思さえるむ給。
人はなかしのこや。なつすゝれあそむるにふえんかえ
り給ふ。山井のこゑなむあつ。あまかはくされかや〳〵
まさのあそむふくのこえか給ふ。ありくゆひのこゑぬ

サエナハリソコノ如今四丁三表ニアリ

一日つゝみやかくしけ給ひしは、ことゝもなく
きゝしらぬを、いろいろまなびぬおかしくふかくなむ
とうふことえさせむとてなむ仏ねさるこく
こそふこしそわたる方のこそいとしかゝれ
しゝくたおかえ給ひし、かくこゝ給ふ文ゑとう
くこそもしらくていと給ひかくてこそはられも
めくさくへきらぬも給ふ禄ともあれしてまよそのく
くあそひすらさのはうまつられとすわたに、
藤中将源中将なとに、こくひなこをのこそま
つる人をさこらたくまつ里、それなふうしあそ花
とふ。武ひのみこ源乃中将のあそむなに乃こゑ

か給ふ。うちほかうけ川尋えなむ。いとくつこうか
まいらすけのこむからや、あるひは梅のあな
琴おした給ひていかぬ。藤中将のあそむなすふれさえ
か給ふ。まゐれさえなん給。あるしのゐらくたなふえ
律めやあれ急こゝかれてそやとて人川さま志
てたくへいらぬ。すけをこのあそむなれのこゑか給ふ。
こゝ琴里のこゑなすむ給。あれかせちやのしやなか
なゝの絹になふのこゑか給。こゝろさえなむ給。
人は弾くれのこや、なかすこれあそむなふ出ん仍え
か給。山ひのこゑなむあつ。おなじ川くされかやゆれ
まさのあそむなふ乃こゑか給。あくゆひのこゑ於

毳毛不由介 尚書云中冬鳥獣毳毛孔安國注云鳥獣皆生細毛自温也 頌抄十八

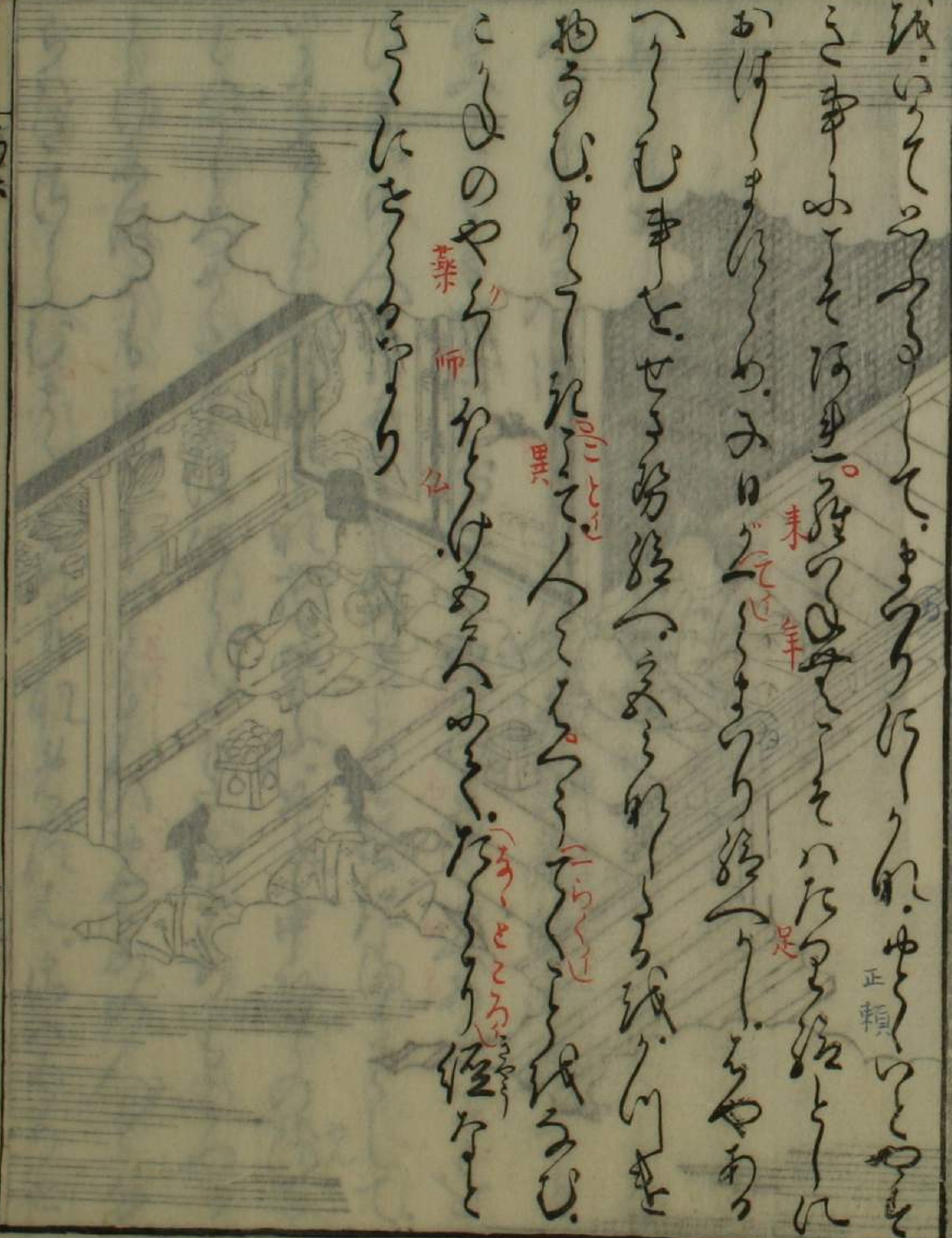
む侍りしとうと紀梅き。ふゆ毛なりやみとらひこそ
しらんは。源中将をむかしの所にうつりはまるなどたの
めくらの君はなまよろこびえかれたるや。わかぬをへ
君はえたむ侍。むかしみこそみくさせいはかい
つまうさの庭かりやとてはづすちまかうくてかん
さらめみとしらいはもひとやすてものゝさもれ
いしまくろく海つりぬ。うく母されまうそぬ。言ふ
中将えへうの君を。御らくはすゝくまうて清へさ
くわしとて。あはほいよ多小あさましくもなかれ
しそしゃうて。よのをかかえ泥あへえいとなり。これ
つゐくよきらむまいづらもはかしれ。祢も様う

しとらかふさて。梅かりなれ侍らさま。一日去文みとく
あれをなにもせられ。やうて悲しまてなぬと地え
しいかくふゆて侍るかくむ。きうあやしのつきへ
むしや。中将されとふしあるうしのなかそたるや。
あしいひとすらまちか絵つゝ。なとはわくすやるふ
とらかれ。中将玉れてれましいふ。源中将のさとて
そうしやとしられ。ほくへうの流れ地まてうかうしのあと
ひめりや。中将うるしいてむかりぬの跡いさこれ
みくのやうふゝわしけわせあり地らせそ。あの人を
きていまさへまの一ふくしかふをむてふも戻みよ
つし。ふうらうとされ地りいさえて給へとは

つかうまつるみかとさくまてぬかつけみなさうそくりつくそそ
これかれとは中納言とのこれとなかよしなと
侍りてさうそくそわらふかとあくにえんかをそへても
いふとふいえゆかりひ給へらぬはさしとみえや
ちうそうりれうはつねよ也。中納言のみれかの
くらゐもくそするやとれとつくりくて大納言
いかし也。后の宮六十の賀つかうまつりたまま
なむいれはのやうふたりそめてさうしきれて
うとくもと。ほやふしこのふしくしてやくにこ
え給ふ世の事そのとちにめいめむしつらね
まつ文のうへきみ。まつねしき仲かさたの給ふ

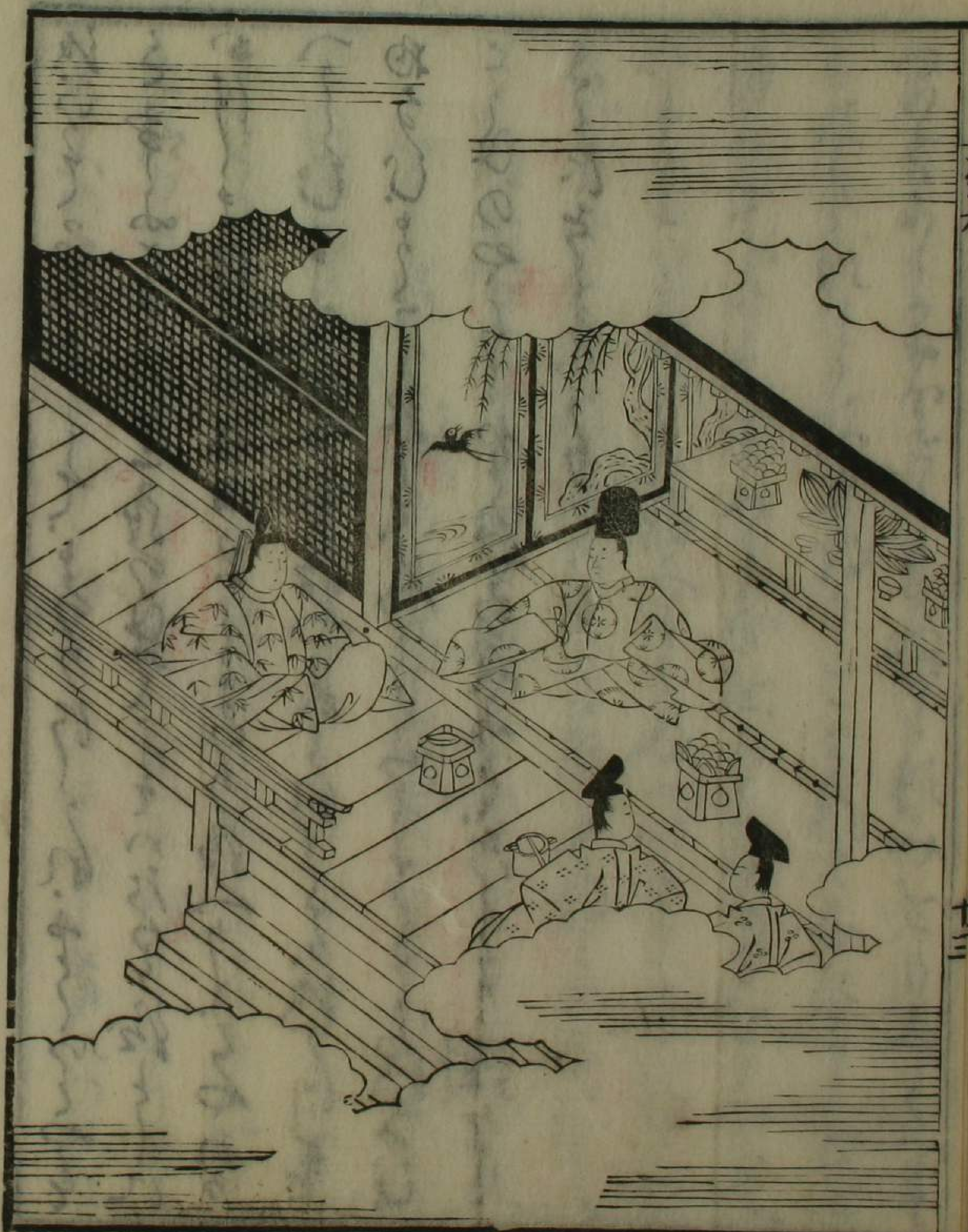
殿。いつそこなりして。まうけられ。中らいとゆかし
こと事なとそ侍れ。殿の御子こそハたち給ひし給ふとし
おほしまうけ給。みのてくしまうけ給へり。とかくある
へき事をせさせ給へ。いそかせ給殿の何を
のするまうけれにて人くるくうら殿なむ
このこの御やくしかみけるにみきさたうことろ経なと
きくにきこゆめり

つかさめしのみかとにてまつりぬれはみなさたまりくるそ
これかれとは。中ねりしこそれとたれなりしぬと
はへりてさふらふそれからなとあらくにはしめをとらへても。
いてそといひえゆりひ給へりけるぬは。いたうしとれのや
ちやうらうのれうはいつるは楚。中納言のみかれのこと
くいゑんちそすなやとれとうつくくて大将殿
大それかしくはくて右の大臣六十の賀つかうまつりたまふ
をむれいはのやうふたりそをかをてさうらうきれて
うとくもを。はやふしれふしくへしてゆくにほこ
え給ふ世の為それのことはなしいめむしくらいお
よ。ゑのうへまいりて。ぬ。しとらせ給ふゆかりきたの給ふ

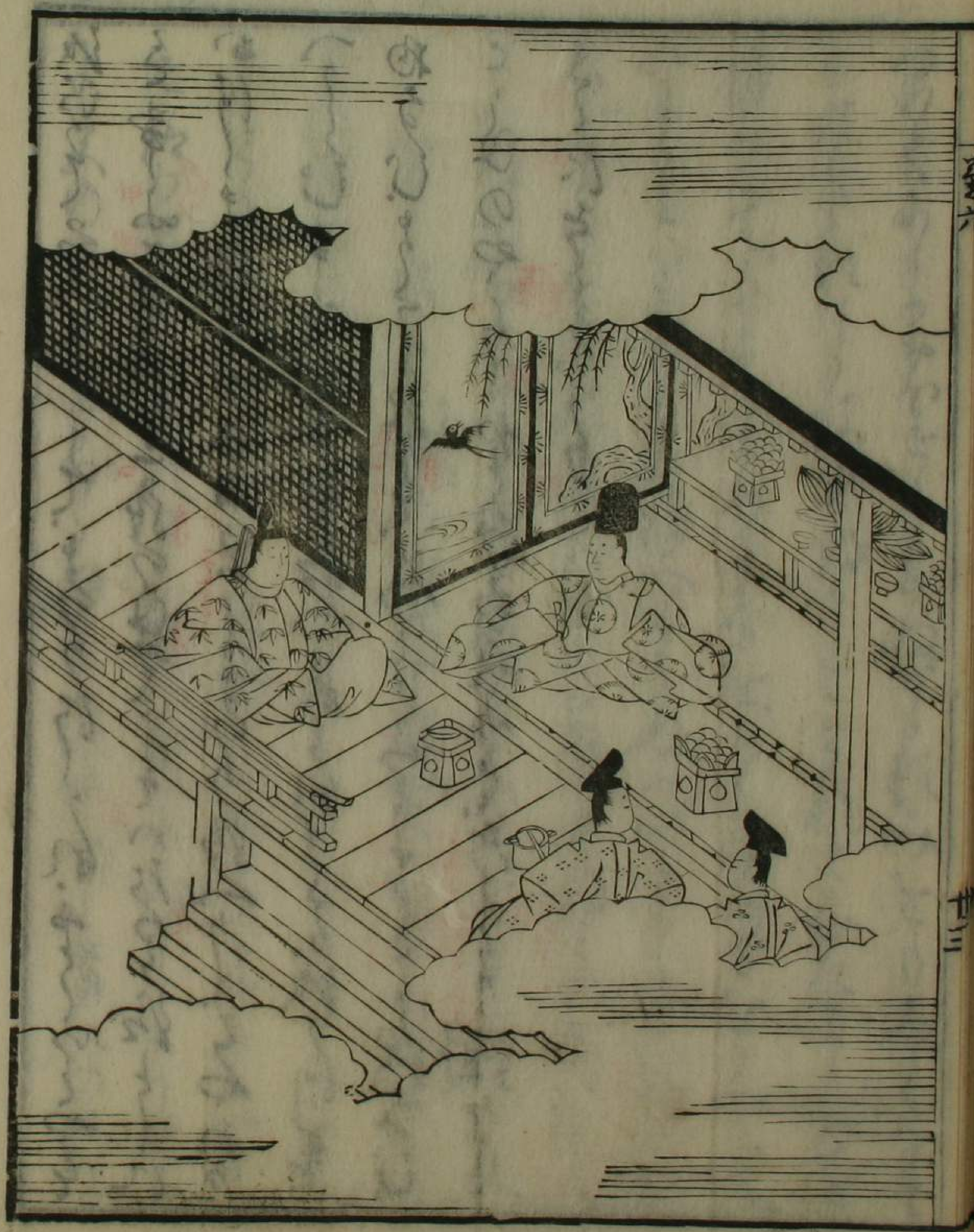


殿。いらへきこゆるにて。まうけられ。中ないしのすけを
こ事ふこそほまうてのまうてこそいたはり給ふとしけれ
おほしまさりて。みかとまうしりたまへりしに。やあら
へらむ事をせさせ給へ。ゑらのかしこき殿かいのを
ねるむ。ゆかしこそえて人々こそこらこそにつかはるむ。
このよのやくしほとけさんみえて。たゝきけんりけ経なと
きくにきこえけり

こ宮は法服をなむ給ふ。これにつけてもことなむ
めはれとしみたて紙もてまゐれ給ふを
させたまふうちにもやかうてはあそびし女かたの
給ひけるかしてこのしめさせたまへりしまいよれ
みこたちの御こともゝ左大弁宰相中将などを
のみことゝもつてなりやいやおこなふことを
はまいの人よりおもしておほえ世を捨給ひかして。
いかでなくなせむと。れ世を知りぬ。かく中将殿の院など
と宣ふところは思ひしかと。女もこゝもそゝう
しけるはまほしくいまの御やうのへくなる
らはさはしひきこせぬとおほえ。はいあると



こゝなる法服とるものゝなかにてとられにとらしとこそむ
ゑしみゝはれとしみえて紙ともろともにれ法を
きせよたくさふらふやは、ゆくらはあそひし女はものの
絵かきなとして、さゝめかせまへりし。まへはよれ
みとらる侍とも。左大弁すゑふさの中将なと
のみこともつゝみたうや。やかて、おとこゝえをと
は、まいの人よいとしておほやけを侍れ給へとして。
いつてあるをかせむとおほやけ。中将との院な
とふしろめさうはほとしいとこゝ女ともらもかへつう
しけやはもほとしうちものゝやかのへつゝな
らいさにわしさせあそれ。はいありと



とかくするほどに、としくれぬ。めでよはりて、人
われきみのうらふめし道て。年比なまとお
ほふすと。めしこらの御れし心志給ふぬよも
とすると給をあるけさいのくむやえ。なふ
たしめんとそあまし。せうそこもめしほう。少将
なかなかられたきうしう。たかふ申ふうてくらむ。殿
の御ん車にて思ほしまうるすれたくあまりに参る。
うけまうら。めさるゝうるやかくしかしの紙山そくらん
なやしくしてと。うこいそこれとも御南しう
こ皇よ給ふとて。すめやうにおてにもめし給なる。
給ふものさうし乃まゐらのんれやりしつ給とう

ときこえけるまうすらんいかにうける程と。いかわたこと
ほどにゆへひつうまつるをせむとものひのふうとふ人
めふうせうてなつ人々をかれん御すふうんてかつく御かな
しうそられてものせよる給ふ。少将久義ごろみそ
ひてふうしにつうゆうしぬこられ。たのほうりは
らむをう給ふごともふきぼげれをまうてみこく
そのへんによりうねうそれくつうまてつかるを
しう我のたうれもつうまうしれたうかしこぬ。
ゆきあさもたまし奉中に御くあそひさへうく
もれさるかえてそうの少将のつ給ふこるはもと
中皇。文にたといか少将らうこるむひやしへとけたらない

けうらなる御かたちなり。そのころもにさまよくふみのく
ねんごろにはなせそくいふにこそ。涼はいとゞうく
世の人のまねはかれわろくなるをおもふことも涼
くちをしうおもふ。さるはあれさまさまにひかりけてい
とをかしけれは人にみゆることなれはとうこさきこえ
一条殿ぬ。少将涼のすけゆきまさもいとをかしうこそは
いかよめのさまなどこそあらめ。なといふにいかで
むすめもあまたありてかゝるはとおもふに
そのくにとおとゞいはむとするにもいとこゝろにくし
少将そのかみすけにいでたちのほとりにかよひけり
世中にいとよき所にすみけるは川のほとりの山里なり

おくよみやうかうすなよ。人よりもまさりてこそあり
てすみけれは。こゝもとはかなくにてやみぬ
うちにもえこそはなれさりけるをおもひ
ひのさしてうちさむる武部ときこえ
ことなき平家まろにやあらむ。殿にさたまりて
人々のなかにまことのわかさたまりて
ことにおのれをそまもりてみえける
中の君のくれにとゝまりてこそはやまむ
涼くはかなくわかれて弁殿のかたに
さたまりてくれにとみえ給ふ
みかとへのさむの殿ねんころにてこそ

当巻初丁十一月朔日トアリコゝヅ甚下旬ナル

すさましき夜かれたちのころんとりの
なき思ひて消えにしも月のつこりける
里んまりぬれはむしかるゝ心まことりくの
侍り

物さし出て御こゝろゆかしくやことみ
思いつけ候へむ母をおくる

ちとせや神の社のもとにははかなき人も思ひねと
ことゝいのりのふる雪ふみならしまいり
松すかね身をたちれ人の雪すれや涙にくもり
よゝを重とひらきに読しつきゆきさためとおぼ
えさかりあくるや

○本句旧本諸本共ニ同

あの人は雲の山もつゝりあむしられくのと
けう人のあはれさおほみみえて庭にふみとえまち
春ね出て見せらちてもしられくものまうち
の夜

くしさしされまうとさらの袖のいろもふみ
しけるあねれふみとそみゆるすれりのよる母と
らってまうりおくえ

おくしはちそむつらき袖のむしうれの雲をと
かよふやみえたりふも。かくかりのちる身のけ寒れ
とのる雨に夢をみてとみよ我たち侍ぞくらち
父かくすれの衣をこれけるのみなく人ぞえも

○卒句紙本諸本共ニ同

すゞろに忘れたまひにけるかんどりの
まひと思ひて御覧じけるにも月のつとりける
つまれ侍りぬ。恋しきやうの表具(ひやうぐ)ありけるの
給へり
様ざまにも残りなくおもひやりつゝもやらるゝみ
ないしてけるを思ひやりつゝ文
ちるや梅が袖の中まではかへるも人も去ねと
まといのかりのあふる雪(ゆき)残みてこそまかり
数ならぬ身にあまれる雪すれや添はれく
まかせとくひろきは読しつゝ地とめとめこ
えぬいりあるくもや

あまのかはに雪の山をつなぎかへくのみ
ゆく人のかれさはおもみいくしかもみえさせ
左大将のさせたてまつらせてかくしらまほり
の衣
くらしくれぬるとものの袖のいろもみ
しはるあねゝはあふとそみるらむすれりのよるを見と
らそてまいりけるへく文
むかしほとをむつゝしく袖のけしきれのゆかしきを
かみつかしん人たりとも。あかつきのこゑ〳〵あけはなれ
もの御かたかみつゝとみにはつかりらせてこちら
文はまくすれの哀とこそおもみなしん人こそ

ありかたかられいつれのありかたくおほかれとことえむあれ
いとしやさしきことえまうかへるや
あはれのさうふつま清すれはまよふなよふかあ
やさしきかいのつかまえられなりてかえれ給はしら
しるしらええまふ頭中将なりて、つまむしろ
まうのつねよりくたりとて
文章のしるしかまとられおもてなしとのやし
ろとゆるさ給ひめや。うしの御ゆるしとみさゆふよ
いまゆるされしさまて、まうあくみや給へる御
しやれとのるさゆるく
さえれたのあふあるくあふらはとくのやし

ろとさもはかしかやうのまふうのみて
むかしあつらてうし進まも西山にまうとひ
ともされみえさえも宰相すての中将殿になりけ
ろはしるく
つえられへあやうそみのよはしのえに
あしりやさくらむとまへるまゆかゆるされえ給
あはれつられし花うつのしみしたへの清へさら
よ、なみのひとまえてぬるかりて
とし、はらよるかはとくる花られえかり給
あるれるあるへ中川にて思ふゆるまれとく
みせてそまうさて、ぬやうふく物との給ふに

後うち一本暮打トス
今ノ下ニ哥脱スルカ
○率句徘本トシヨコエチリトス

蔵人の源かねもりの朝臣のゐさらすかも
まうでくるとてよりきてあるく。はへらは
れはらすけ
きゝろつそしとこそやはらかにさ
みつなとなとくりとらん。ところへ宝有給
ほそ。六十の公み給つるく。そのかなよろく
まらくうらうくかなふ河くられ。大納言の
いそうりみくかぬうの日うらうるを給うて十一
日小大判記ようされ。去年のくふなされぬ
くしてしられくまふてなすし。内宴よ出されて
さくあたらのことぬよあをゝぬうもて出

年カヘリ今ノ四四十ウ

六七月 今四 五十二ウ
オトコハオトヽノ誤トスレド従誤ニテ
オノコナランカ今四ノ五十二ヲヨシトシヨ

あうりそのかやふさのゝをれとも公めし
めうとはうつられ。あすし出へもかくるむもとも
ここてをたてくそれおこ文おこらんとしへと
かくくうさくしてそそまう
うくつの君まらいつうを河て出と世ふり
さ梅とゆりひあふれうくいゆりかえぬりのよこ
そあれ進とさうそれえ。ゆそうしとのとゆかれ。
うくてさこの御殿正月廿日ふいてくうれとと
せ。浅うまつり給ま々。海うけしまてうをも乃
こ川しむまうひ。ちび。しやうかびやくし。ほう。
らうれつのてしてゆかいゆうと梅ふし代ゆわくると

後うち一本碁打トス
今ノ下ニ哥脱タルカ
口本句絆本トシヲコエテリトス

蔵人の源かねはとりの朝臣の娘ちひさきより
まゐりてさぶらひけるを。いとらうたげに。さすがに
なり日ごろすぐ
まゐりたまへり。ところ〳〵はかやうにありけるを
みつるに御覧じおぼしける。ところ〳〵は宮たち
のぼりて六十あまり給ひてあまりにいとかうく
まゐらせたまひしかば。こゝかしこにありける程の
わたりたまふ。かくばかりの日にかゝるほど給ふ十一
月に大嘗会のせちの御ことにおこなはれ
ければ。ことしはすぎて。内宴ありてまゐりける
さらぬことゞものおこなはれけるに思ふ

年カヘリ今ノ四回十ウ

廿七日 今四 五十二ウ

あらぬことゞものおこなはれけるにも心あり
めのとはありつれど。よしある人もなくても
さてしもあらぬにとおぼしめしけるにつけ
さても〳〵あはれなり
さてその後よりいつしか内にと世の中
よろしくなりゆきて。かくいふはかりのこと
そのほどにきこえられて。世の中ものさわがし
かくてこの後の大饗正月廿日にぞありける
よろづのありさま。御まへにかけて三条の
みかどのまへにて。ひやうぶのもとに
ものゝすぐれて。いとめでたく御らんじける

御厨子六双

されどものくるしうすくりれくしうかへりて御からう
（ロイ）女御女の御れはしますそひありいてあいて（昊）（寰）えしあれは
そうぐ（らイ）の御かたねと（光イ）えれおりのこそぢ（ク）くあり（秋）
うゐ殿くくらくるのまれしても凡物いふよ
さくらくりはうそくなくゑろくはぢろ（ロイ）いくすく人
しるし御てうとのてし（ロイ）さるとてたかさる御
たくはちむとゐかろうりきくりかぬさとし
あるよろもむうちしの（脇息）そくさろうよの（抜鬢）
さいれたるうしほやの御さやぐみちやうれ
れよ（は）すうふてへんさうおわりくうしみさうちや
うるゝのくらひあるうきを御さうくよ（あイ）さよまさう（ロイ）い

ふきの殿はおかんなくむしろしきのこゝに
とゐのけうてうれくなりはしめくをおかしげ
おしうくて大夫日海かりと給ふる雨雲よりけ十二（トヲ）
よはとゝまりの（ロイ）ひやうげ（檳榔毛）十（トヲ）これいろ殿二しもとに（六双）
之人のくるま二御せんあをあけしこの人のぐるまに
位五位百人六位くおはしましひ大女一宮
いまぞさそゑもんおりつよそひもあひつき（ロイ）殿のおり
物くるまはてゝはやのとまりの文十一まい彩しあろい
ろのおりぬ之人（佐イ）（五重）色ゝのうへの御ぜんしろきかれく
れ人のくるま出来むとものゝ人何やはくやれさくさね
の（かイ）御くゝぬあやよみもりのも（裳）じやう下わたくもてはなる

わくはいかなしうしとみかへるしきぬれはへかくる
きこゆかくて宮は給ふよろこひはしめさせ給へ
やしなひの君たちいよいよものかなしくのみ給
給ふをしるへくそいとおもひきこえさせつゝ
ときさへおもひもしらぬけしきのうちにおほしけ
あらはてまつりけるかうちそへとこゝにはいとゝおもふ
給ひはしのそとあらはすとてのまへおほしのおほ
さらにもよろつのたゝにきこえさせ給ひのちも
たはすれなからしをけふはりぬれとよむ給ひけれ
なとおもひかくてよろ御かたのおほしたまひけれ
てらしもの人のさやうにまつたるものかたは

かはりゆく御のやうみのまさ
睦月松のえにしるまよいそにけふとへ
てらすかはゝゝるへきを

右大将 兼雅

君か代にそたのしきまつの松のえはいはほよりもへにけるかな

二月人のなをよろこそのあやを

民部卿 正頼ノ智五君ノ夫 いまう名本にイ

よろつよもかくこそありけれ松のえのみとりにそ見るよゝのはるかな
三月とくるとてかゝるよに松にはありなり

源中将 涼

みそきする春の山辺にかけてこそ松の君かへはまたはにん

四月かみまつるところに山人くだれり

頭中将すゑかく

榊もろかざし来りつゝ夜山にはゆきかふ人のあまた数もしられを

五月人の菖ふきたるをながむるところ

中将すけすみ　正頼ノ三郎

我宿のあやめかる花の時なるらんあやの里にもふつきされ

六月人の家にいきあかりて涼みたり

少将なかより

池水をみてつゝも夏なれは夏の氷にあまた涼しかるらん

七月たなばたまつりするところ

ひこ星のたえずもあひけるとしの七夕よりはみなとよりかへる

八月十五夜しける所あそびたり

侍従なかすみ　正頼ノ七郎

秋しれる月のかげをむしてあきの物思のねとどめてとしつる

九月みち人の山道にはいり見なれたり

中将さねより　正頼ノ聟四君ノ夫

紅葉の秋のみちを道とてけふりつゝ錦をぞたちかさねたる

十月ありあかうして見るもこころにける

左大弁　正頼ノ太郎忠純

これの深日をくるふとそれあまりかたくのもとをみなれあるかな

十一月かりに人のあつまれり

ひやうゑの君

ちりぬりよ今や白雪のしらよ積るときよきえされ

十二月仏名しける所

中将なりくく

まていの仏の名すはれ身に知りや千代とも祈
あらしみくかねすうらりけるよあいのらく
うちしはしまりてしらかさい杖なえきしなく
みひときさらくしまいひるもまうかまいのさそれ
らわさうるよせもくろゑまうしれく人のるかく
ふのさみしらされ河げやなさくる心みしらうてま
いかくてあそし涙五御とけ日さうかちむれひ
ねけしろうねのほくきちむとひもしてくろめ

サヱモンノカミノトノハ正ヨリノムコ
八君ノ夫ナルヘシ

とはつのくさみて、おろかなるなうらしてみかうき
それ乃御まへよまつり、御なかはまうさしてあるは、
右大将ゆれ六十ゆかしい心のれいきうしろくしうかり
のとれのをとはくしてなうむしたらぬ辰上人
とりつきてまうわ、女御の君乃せうなつて民部卿
よらん乃ならしときかれし事なくうらしさらひの袖
事さまへれ命とのよりしとう大臣よりかくしめさそ
みりそ、ひろきみくらう乃母すくあるれあくつ、あなさ
のおんつしのさくらかなくもつらもまきえれ宣旨
ゆりしん内侍命婦らうしへ君まへりは、いはるかもそ
ゆそれよらもまく給ひてむかうめみてさられ

かくれなきはやかに白雪のうちにつもれる時よそ見えけれ

十二月仏名しける夜

中将なりしく

まさていの位のすゑかれ見にあまりやと代とさ覚
あさこよみくがねすかうけむもりのなくく
かりしはしきらてしらかさいなおえさしほく
みのさほく火まいひもまかまいりたれ
らかをうまよおもかくるゝまかれへのち御く
ほのさみくられほけやあきしかしうま
けかくてあそし御まへ御けのまちかひれひ
ぬけしろねのほきさちむをひとしみてらうつ

とほりのさみて おほかたのよそほひあさましうしてみかうさ
されたる御すまひよりまゐりて御前のまきとしあはれは
左大将は六十ばかりにておはしけるにしそくらりけり
のともれなとをほくしてまうでてむしもちめ尽上人
よりさてまか女御の君のまうちあて民部卿
およんの人とまされ中ましとさくらしさくらの地
はなしまうされ命とのまさ大夫よりしかしめさそ
すらちてひかさみくらの中にすけられたりおほさ
のなかなかのさくしくろれもなりもたまれ宣旨
はりし内侍命婦らかなかまいりほいのよよて
給それらもまく給それらむちらめみてさられ

おほ人おもひ人まゐる人のきよ人さてまうてくぬよろこ
ゐこゝのゝみかのとゝめしつかさもらうくのはく
つまえくことゝみとつのたかくちともさよりかし
へまゐくりてつゝ給くさうり給はかてさうてかむ
の蔵よつかしさふつうすゝく
おのれまうりよつひえしれわしあつの
給の日の雲君のけりようくなく
まれまうり給ふとまつとをみつゝうと
あまりくる君りとせれりしか
あまの給ふありよ美なかしれえしめよかまつの給
わぬよかれしうてそひさゆうるまつりみともゆき

てらかう給へてくゝしまうてそのみゝたち
まひつうつ給つまかしたゝくるよのくさゝあさらく
そ母ゆむひまふゝむとありつうゝつすゝいゝゝし給ふ
ふえりうら給ふよみとゝらく絶えそしゆう
てそこ給の人ゆゝへ給いまれとそへのさ
りふくふまくの御えらみくゝ人のとら
さくそれておき起ゝうぬとひゝくゆく
くこれ世よみえぬよろ給をむしせゝあけ
神泉給ゆさうすしみえるしまね札
てかれふとされみちゝむしらめえてしうか
ら世かかねりすしみくとゆしえね給しつれく

おほんおと人まゐる人々さてまかりいでぬなかにくる
こゝのつかのゝゆかしつかさまはらくのはく
まへくとゝみよりのたうゝ地ともさらうめし
いまそくりてつゝ経くさうり給はゝてまつりなむ
の命ずり給はしさふつらすく
おのれきゝりよりひ久しかれあり川の
経の日の雲気のけりよりくる
まれありの清家とま川ゝとみゆるを
ありりくの君のりと生これりあ
またの経ふかりの書ゑくしれてかやうゝまりの給
りねゝ生れしうてそ宮ふさりつまへりみきとゆきさ

てかのく給うかくてくらうてゐりてさみてら
まいつりまり皇太子のくかやかとらく
を母とゐまふりむしらわりつゝくいつしと給ふ
えうりちら給ふよみくちりく絶えそてまうり
てそとの人々さうくははまれことそへえのさ
うりふくらまゝくの御前えのらみくゝ人のうら
さんこれておもむきうらふとひそはしき給人
くこれ世よみえぬものを給をむとせしふさおけ
神泉苑ゆきとき母としみとみえさうしまねれ
てられそとさなれみちうむこちわれとくうら
らんせかかねらみてすみとゆきとわ給しつれく

いおとこつまよりこそまへの給ふたゞいけかなきに
にまひへ給はらうさあやしうまてみことゝひて
つゞられてくらふくと雨なりしかば。いけくうそら
けうせくうしのさまよ
うちはけうこそひそれはる雲ちくあそひ
そむらう川のへれうつくやあそこそ
元よこそしうとのたまふてあるのてあそふ
川のひのみかくうつしけるを給。后のみこ女一
文らうしめそてまつりたる殿のこゝろう。
御こくひゝせそてかうり給。后の文おくこそて
みくみへ給くぬそしておくれうこふみさちや

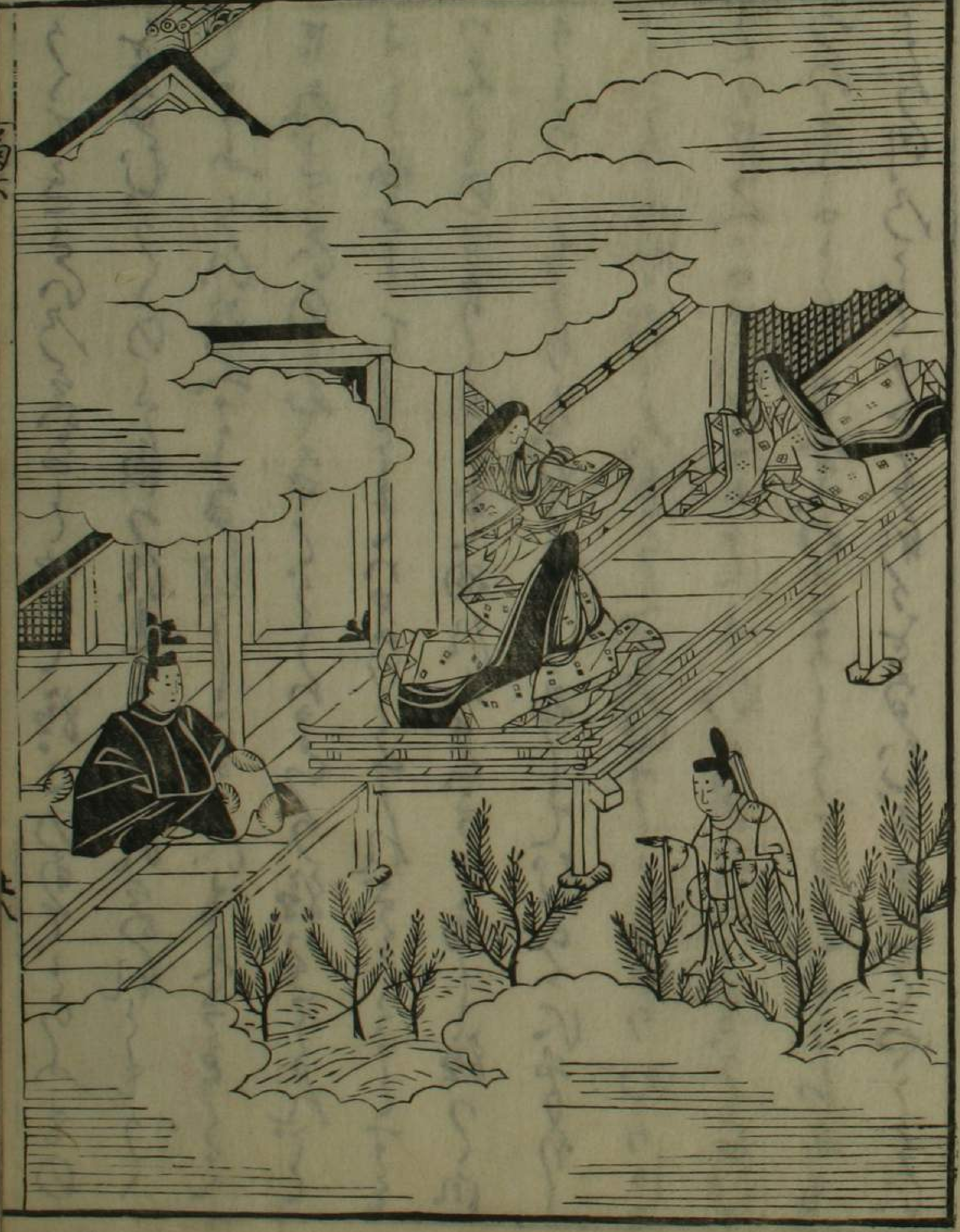
うさしいそさせ給ひてにおもとにもはゝきこえて。
おほえくちうしつきてまつるせそまうせさせまく。
ささいのこゝとくうこそはおりうれちふくれちらあ
けさせふとしきこえ。いとおほれやしそて。そうしとふ
ものゝくゞ給うしくへて出のくへよはぬくを
おくはとくぐそてまつり給。おくえはくみれとき
ちく給へさらふはうりよはこえてきこえや。す紙とうしや
とれこえまへはまむ。きこえたくれともくつうう
まゐり給ふなたてまうれそやかえうりれかれ
ぬ君もし。とうさくみしき文さらしめはねー
将されすくむ。まうそよれしうれおうしきふ。

撥線なとしあつかさりの人せちろくまりなりなり。
玄象なりくて乃銅にさく所りしてあそそれ
とのまゝ太上将の母とへなとさ紙母して玄て絃
よこれ人あて玄なる人しと出あさきいれ玄やとわ
早くうしたてはさるみれめりうしとそ
係りよりもきりふれ様のひ乃物しきいひくま
川乃絃さくふそたてけるおそく文
のかられて乃世のしらへ礼ま入なへはつをひれ
ぬ撥ふそあつちゝあしきなし絃。右文出ろり入乃
くゝのなとせとろいこくのなと極月ともあかく
よろ川のありちうれ撥ともいまて、よの中ふあり

うちれれ出之人ひさひ御りくしさみりくゆひ出に
文つて人乃たしめれ御てうとたてゆまり絃かくて
玄象をさいまなりまりのゝく。さゝいの文は撥うら
あとくきうて絃ゆてが、時とゝらぬともおせしれそ
よ。年月をれ乃をしられたり係る形くれまさ
のさみの乃をなを絃よ。のうりをくたくまりふ乃絃く
うれもはうれふ出すがまるとくとゝるとれたして
まはずみのよ川ぬ絃そらよまむ。玄文ならしれて
めふもまうりとせしとまふく海つりまへとう出絃
ありて出形しくいとて見出。たまよりい海うけ
くさふつく娘ならるゝむするなりて人絃かくて去ね

薫乃大将より為にめし給て、ひそうしくもあるまじに
きこえさせ給ふ乃文ハもてまかりて侍りしときに
まろふやや侍らむとて三のきみのめやや大将あれ
ひさしやとて御きこうそこなれとはつのりきこゆれと
それなくきこえてぬれうもなかりぬくなんいひて
それらとちうく給はぬなくふねそうけ給はつなへれ
まつ大将いくとひまうきてきこゆまへてん若君為い
めすう人まいりてのよ物するはかうなくもきこえし給へ
ともやは大将うを給ふる御ともあれとさるべくことも侍
らさらんれハ今とためきなるう侍つらり大将れ
まかりをつるかてハあなれきうなととも侍りし

いとやさしく思ひしと大きとはつねてちかくてしと
いふらうかなむきこゆるに大将いひしくねうなる
みとも侍る御くの旅人なれもつうやまつりね
つきもの侍しえまつるせむと申ろかうとや
むすとれさん人おもはしと給とうけ給へいつら風なる
きならしてなむ大将うらひ給へくまつり
給ひんほうこそならむとも見えならも大そう
まいしさなめりそや、あふの大将乃らしもや
いふとも有る後ぞそわくいつのり御つうたえき
とうつあそくにうき給さこめくむいはそりとや
めかしは大将いひつきれき人のかなかうかうせされ



こりなん甚文字しくハたれとけりゝぬこと
のちたちふ世をむもとこてはふられとく
やうしふましとらうかうゝぬ松のひりいまつも
うひうくやりかゆうられ・ときらえのふたまめ
とれつる松のひれあやくこさことあれはうらゝゐ
松とえてそたのまる・ふとくきうしのふいまりしこまへ
りきよ　しら絵ぬ

かくてさゝいはひの家にとゝめし給ふ。このあてなるもの
をさむ。かくのこ海乃はてまても。これかれともかく
てさふらひ給へとなむいふし。こおにもえさらぬらえ
たぬさきのこやまとのからかうち給はさてんと。
さうなきしてもこそはまつりすれとおもふさしすこ
いへものゝすかしうこそ抱なめりさらく抱し給へつれ
うしろめたうらむ。いとしよう抱してむもちにゆかり
すきらみやあらん。さらえてなうしくたりめうじ
とゝさくよまつるとし。こひくの給へとも。うらむ
つおてよとくる毎。わさもしうこらねさらぬも。
ま川乃ことゝをとるむ。あ家いさやうに